「ミエン・ヤオの歌謡と儀礼」

廣田　律子

本著『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』は、アジア研究センター共同研究として 2013 年度から 15 年度に実施した課題名「湖南省藍山県過山系ヤオ族の言語学的研究」の成果として刊行したものである。

2008 年 11 月にミエン･ヤオ族において実施された度戒儀礼の調査に始まり､儀礼内容の分析と合わせ、儀礼で使用された大量の漢字文書の録文作成、校訂作業、解読分析、現代語訳を進め、儀礼の実践を漢字文書の対応を明確にし、儀礼知識の総体を立体的に研究することに専心してきた。

研究を進めるうちにミエン・ヤオ族の儀礼知識の中でも特に漢字文書の読誦詠唱法が極めて複雑であることに気付かされた。

種々な儀礼で読誦される韻文の経文は、7 言上下句が対をなし、7 言の 4 句をひとまとまりとして構成され、日常使用されるミエン語や漢語とは異なる音訓が付され、経文によって異なるリズムと旋律をそなえた曲節を付けて発声される。韻文経文の内容は、ミエン・ヤオ族のアイデンティティーの根幹をなす神話や歴史叙事、儀礼の執行内容や祭司として守るべき教訓、口承の記録等多岐にわたるが、単なる道教からの借用ではないミエン・ヤオ族独自の信仰知識や伝統的概念が凝縮され、対句や反復や多義の比喩表現が用いられる。儀礼の実践では経文を文面通り読誦するだけではなく、口承と書承部分を混在させたり、掛け合い問答形式で進める等極めて難解な法則が存在する。男性祭司と女性歌手とでは同時進行で詠唱を行なうが、経文や詠唱法が異なる。今まで充分になされてこなかったこの韻文経文の儀礼における読誦詠唱システムの解析を進める必要を感じた。

この解明の手始めとして､儀礼の中の歌謡の実態分析と言語学的な分析を進める研究プロジェクト｢湖南省藍山県過山系ヤオ族の言語学的研究」に取りかかり、その中間報告として成果の一部を本著にまとめた。

収められた論文は浅野春二「「招兵」における五穀兵・家先兵・元宵神―中国湖南省藍山県の過山ヤオ族の事例から―」、内海涼子「ベトナムのミエン・ヤオの衣文化―ラオカイ省の事例を中心に―」、譚静「過山系瑤族（ミエン）に見る「三清神」について―中国湖南省永州市藍山県の儀礼神画･儀礼文献･儀礼実践からの考察―」、廣田律子「儀礼における歌謡―「大歌」の読誦詠唱される還家願儀礼を事例として―」、丸山宏「ヤオ族宗教文献「意者書」から見る還家願儀礼―大庁意者の問掛と許願の部分を中心に―」、三村宜敬「儀礼にみるヤオ族の船―ヤオ族のもつ船のイメージ―」、吉川雅之「『大歌書』上冊記音―ミエン語（勉語）藍山匯源方言による―」、吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語―「歌二娘古」発音と注釈―」の 8 編である。

吉野論文はタイ北部をフィールドとし、ミエン・ヤオの歌について調査を進めた成果である。4 類型の詠唱法の存在を明確にした上、歌のテキスト「歌二娘古」を用いて、漢字と発音と意味の事例を示し、歌謡語語彙を明らかにし、韻律の規則解明にも踏み込んでいる。

吉川論文は言語学からのアプローチの成果である。ミエン・ヤオ族のアイデンティティーにかかわる歌書である『大歌書』（中国藍山県匯源郷湘藍村趙金付所有）について、祭司趙金付氏による読誦詠唱を記録化するための調査を進め、趙金付氏の音声を国際音声記号を用いて記音を行なった。

丸山論文は、湖南省藍山県のミエン･ヤオ族で行なわれる還家願儀礼で使用される漢字文書「意者書」を取り上げ、複雑な願に関連する儀礼の全過程を記す「意者書」に対し、歴史学からのアプローチを行ない、録文を施し、その内容について儀礼の実践と結合させた分析を行ない、その特徴を明らかにしている。

浅野論文は、湖南省藍山県の還家願儀礼や度戒儀礼や婚礼で行なわれる「招兵」儀礼について、そこに招かれる神祀や「招兵」儀礼の実践の内容の詳細な分析に取り組み、招兵の異議をつまびらかにする一方、招魂の儀礼との類似を指摘している。

内海論文は、ベトナムのミエン・ヤオグループに存在する多様な衣文化の特徴を整理した上、特に儀礼において祭司や受礼者が着ける衣装について言及し、神画に描かれた神の衣装とも関連させ、伝統的な衣装が継承されている点を明らかにしている。

譚論文は、ミエン・ヤオ族の儀礼において祭壇に掛けられる神画をテーマとし、中でも三清神を取り上げ、三清神が描かれた神画だけでなく三清神にかかわる漢字文書の記述内容を解読し、また儀礼の実践とも関連させて分析することでミエン・ヤオ族にとっての三清神を立体的に解明している。

三村論文は、送瘟儀礼や度戒儀礼や掛灯儀礼の実践における舟と送船の位置付けを明確にした上、ミエン・ヤオ族の儀礼で使用される舟の意義と特徴を解明するため、周辺諸地域の儀礼における舟と送船との比較を試みている。

廣田論文は還家願儀礼の盤王願部分についての儀礼実践内容について詳細に分析を行なった上、民族の神話等が記述されている「盤王大歌」の詠唱のもつ意義について論及した。さらにベトナムと中国の「盤王大歌」の部分の対照を試みた。

今回のようにミエン・ヤオ族の複雑な儀礼知識の中でも、特に解明が必要である言語や歌謡にかかわる刊行物が刊行できたのも、調査研究の積み重ねの結果といえるが、何よりヤオ族の伝統文化が世界中の種々な学問分野の研究者から関心を集めていることを表わしているのであり、本著を通じてヤオ族伝統文化が高く評価されることを切望し、また総合的に研究される必要があることを強く表明したく考える。

いわゆるヤオ族と他称される人々は中国ばかりでなくタイ・ベトナムをはじめとする東南アジア大陸部やアメリカ等世界各地に分散して居住しており、収集した儀礼文献・文書の公開を通じて自民族の文化を再発見し、再評価することに繋がると考える。すでに私たちの活動に呼応して、中国では近年新たに省レベルで湖南省瑶族文化研究センター、県レベルで藍山県瑶族文化研究学会が設立されたほか、相同の儀礼知識を伝承してきたタイのミエン・ヤオ族と中国のミエン・ヤオ族の間の交流を実現した。さらに 2015 年 12 月に藍山県で実施された「還家願儀礼」と 2016 年 2 月にラオカイ省サパ県チュンチャイ社で実施された「祭司として養成する子どもを選ぶ儀礼」に中国とベトナムの祭司が相互に参加する等ベトナムのミエン・ヤオ族と中国のミエン・ヤオ族の交流も進んでおり、ミエン・ヤオ族の儀礼伝承にさらなる展開が予想される。それぞれの国で程度の差こそあれ儀礼知識の継承が難しい状況ある中、儀礼と儀礼文献・文書及びその使用法及び読誦詠唱法を収集記録保存そして活用することは、ヤオ族の社会にとどまらず人類文化の保存継承活用の観点からもその意義は大きいと考える。

今後さらに研究が活発に行なわれ成果が世に問われ続けることを切望する。

（ひろた　りつこ　神奈川大学経営学部教授）